

BOOK REVIEW

なぜ、「あれ」が思い出せなくなるのか - 記憶と脳の7つの謎 -

ダニエル・L・シャクター著, 春日井晶子訳

日本経済新聞社 ISBN 4-532-19254-4 2004年発行

評者：今井久登（東京女子大学）

認知心理学による記憶研究の到達点を平易にかつ興味深く紹介した本である。未読の方にはぜひ一読をお勧めしたい。

著者のダニエル・L・シャクターは、現在ハーバード大学心理学部の教授であり、認知心理学の立場から記憶研究をリードしている世界的な研究者の一人である。特に、1980年頃から急速に進展した潜在記憶研究のパイオニア的存在であり、現象解明や理論構築に大きな貢献をなしてきた。本書は、このような記憶研究の第一人者から一般の読者への素敵なプレゼントと言えるだろう。怪しげな俗流心理学の本が氾濫している中で、このようなしっかりした本が一般向けの書棚に並ぶのはとても喜ばしいことだ。

本書の原題（“The Seven Sins of Memory: How the Mind Forgets and Remembers”）における seven sins とは、聖書に記された人間の七つの大罪（傲慢、憤怒、嫉妬、強欲、大食、肉欲、怠惰）のことである。シャクターは、私たちの“記憶の誤り”をこの七つの大罪に準え、それを軸として記憶研究の成果を紹介している。

その七つとは、物忘れ（時とともに忘れてしまうこと）、不注意（するべき事をうっかりし忘れること）、妨害（ど忘れのように、知っているはずのことが出てこないこと）、混乱（デジャヴのような記憶の混乱）、暗示されやすさ（経験していないことを“思い出す”誤り）、書き換え（知識や信念にあうように記憶が変化すること）、つきまとう記憶（忘れたのに忘れられないこと）である。この準えはとても効果的で、膨大な記憶研究の成果をすっきりした見通しの下で記述することに成功している。さらに最後の章では進化心理学の視点から七つの誤りの原因を論じており、それが本書をいっそう充実したものになっている。

各章の内容も、教科書的な古典的研究だけではなく、最先端のホットな研究成果のうちから重要なものを的確にピックアップしている。さらに、脳画像

研究の成果なども交えつつ、身近な経験から最先端の研究までを巧みに行き来しながら論を進めてゆくので、読者を飽きさせることがない。例えば不注意を扱った章では、全米記憶選手権チャンピオンも日常生活ではし忘れに悩まされていることから説き起こし、注意と記憶、特に展望的記憶（将来すべき行動を忘れないで行うための記憶）を中心に論じている。脳画像研究の成果や心理学的知見だけでなく、身近なりマインドの活用法なども紹介しており、この分野における日本語の好適なレビューとなっている。

翻訳は、訳書であることを忘れるほど読みやすい。専門用語も、一部に若干の疑問はあるものの、ほぼ的確に翻訳されている。問題は、読みやすさを優先するためか、訳出されているパラグラフの順序が原著とは異なっていたり、個々の訳文に“超訳”的なものが散見されることだ。さらに、各章あたり10パラグラフ近くもその内容が訳出されずに省略されている（訳者あとがきに「この本は、…の全訳である」というお決まりの文

が登場しないのは、そのせいだろう）。評者が見る限り、省略されている内容は、日本で馴染みの薄い記憶テクニックや若干煩瑣とも思える心理実験の記述であったりと、原著の内容を大きく損なうものではないと思われる。しかし、中には訳出して欲しかったと思われる記述もあり、残念であることに変わりはない。また、このような省略を行ったことやその理由について訳者があとがきでまったく触れていないことも遺憾だ。

とは言え、このような良書が、読みやすい翻訳を得て、一般向けの文庫本として手軽に手に入るということはとても喜ばしいことだ。一読を強くお勧めするとともに、さらに興味があればぜひ原著にお進み頂ければと思う。

